

榊原弱者救済所物語

～述べ1万5千人の社会的弱者を保護した、日本初・日本最大の救済施設が半田・鴉根の丘にあった～



新美南吉童話イメージキャラクターごん吉くんと藤條会長

救済所が今に伝える、
誰一人取り残さないまちを

半田市鴉根区の方より昔の資料に多くの人々を救った「榊原弱者救済所」が鴉根にあったと「はんだ郷土史研究会」に持ち込まれました。その後、半田市・鴉根区・はんだ郷土史研究会・半田保護区保護司会が協力し、平成25年に荒れた藪の中から「記念碑」を現在の榊原弱者救済所跡公園敷地内に移築いたしました。半田保護区保護司会では、救済所の啓発活動を通じて更生保護・再犯防止への理解をお願いしています。

救済所を始めた榊原亀三郎は、「べっ甲亀」と呼ばれた侠客でした。彼は侠客を辞め、弱者の救済・更生保護に人生をかけ、弱者救済所を運営していきました。

私たち保護司は、彼の志しを受け継ぎ、「生きづらさ」を抱えて生きていく人たちの立ち直りを支援しています。

そして、立ち直りを支えるためには、地域のすべての人たちの理解と協力が欠かせません。犯罪や非行から立ち直ろうとしている人には、偏見を持たず温かい視線で

見守っていただきたい。そして孤立していきそうな人がいたら声を掛けていただきたい。地域の皆さんの力でその立ち直りを支えていただきますよう、ご協力をお願いいたします。

また、榊原弱者救済所跡公園には、「三本足の白狐」の像が設置されています。新美南吉の晩年の作品『狐』は、弱者救済所のあった鴉根が舞台となっています。昭和12年ごろ、弱者救済所近くの杉治商会鴉根山畜禽研究所に住み込んでいた南吉は、弱者救済所を訪れていたのでしょう。

新美南吉の童話の舞台となった鴉根にあり、多くの人を救済していた「榊原弱者救済所」の存在を認知していただき、立ち直ろうと努力している人々を理解し「安心・安全で誰一人取り残さないまち“半田市”の実現」に向け、ご協力をいただきますようお願い申し上げます。

半田保護区保護司会

会長 藤條 充

榊原弱者救済所跡が教えてくれること

名古屋保護観察所長

弥永 理絵

「やっと、来ることができた。」

昨年、榊原弱者救済所跡・鴉根史跡公園を訪れた時の私の思いです。明治の社会事業家・榊原亀三郎が、更生保護事業の父と言える金原明善の影響を受けて創った榊原弱者救済所。1万5千人もの社会的弱者であった方々の、こころと生活の拠り所となりました。亀三郎の精神と救済所の営みは、更生保護に深く通じるものであり、更生保護に携わる一員として、是非その足跡を訪れたいと長い間思っていました。長引くコ

ロナ禍で、なかなか機会を見つめることが出来ずにいました。

当日、半田保護区保護司会の藤條充会長や保護司会の皆様と共に公園に出向いた私を出迎えてくださったのは、なんと、亀三郎の偉業を世に広め後世に伝えるべく御尽力されている作家・郷土史家の西まさる氏。嬉しい驚きでした。冒頭の思いを胸に、西氏に御案内いただきながら、榊原弱者救済所跡保存会や保護司会の皆様と、「記念碑」や、新美南吉も関係する鴉根の狐像を回り、忘れられないひとときとなりました。

新美南吉の作品「でんでんむしのかなしみ」が示すように、人はみな、悲しみや「生きづらさ」を抱えています。でも、人と人が互いに思いや

り、支え合うことができれば、希望を持つて生きていくことができます。榊原弱者救済所跡が、そのことを私たちに教えてくれています。



榊原弱者救済所と半田市の更生保護のあゆみ

半田市長 久世 孝宏

国は、現在、再犯防止の推進として「誰一人取り残さない社会の実現」に取り組んでいます。半田市には、明治の中期から約30年間にわたり、数多くの社会的弱者を保護、救済してきた「榊原弱者救済所」がありました。国が進んでいる取り組みが既に100年以上前の半田で実施されていたこととなります。

本市も、この更生保護精神の原点ともいえる施設を、より多くの方々に知っていただくために、平成25年から地域の榊原弱者救済所跡保存会の事業に携わらせて

いただいております。これまで日本各地から多くの更生保護関係者が視察に訪れています。

罪を犯した人の更生、犯罪予防、再犯防止には地域の理解と協力は欠かせません。安心安全な地域社会を築き上げていくためには、更生保護の理解について少しでも多くの人が目を向け、それぞれの立場の人が手を差し伸べられるような地域社会づくりに努めていくことが大切です。

明治時代から更生保護に携わる施設が半田市に存在し、今でも多くの皆さまに伝えられ、守り継がれている様子を見ると、半田市民の人に対する優しさは、今も昔も変わらないことを感じます。

本市といたしましても、保護司の皆さまを始めとする更生保護関係者の皆さまにご協力をいただきながら、罪を犯した人も孤立せず社会の一員として復帰できるように努めてまいります。



やさしく強く、1万5千人もの弱者を 保護・救済した 榊原亀三郎と弱者救済所

半田地方の旦那衆が救済事業をどう支援したのか
地道な援助もあれば、あっと驚く企画もあった
豪商だけでなく多くの商工業者に支えられた救済所

ヤクザから一転、社会事業家に

榊原亀三郎は28歳頃まで、「べつ甲亀」と呼ばれ、成岩町を地盤とする侠客。子分は70人を超えている一家の親分だった。

ある日、亀三郎は子分たち全員を集めた。四つの部屋ふすまの襖を取りはらった広い座敷に、若い衆がひしめくように坐っている。一人一人の



榊原亀三郎 (1867~1925)

顔をじっと見回した亀三郎は、おもむろにこう宣言した。
「今日限り、この組は解散する」。
どおっという、地鳴りのような驚きの声が座敷に響いた。

明治32年(1899)のこと、今の半田市成岩の人、榊原亀三郎は、社会から棄てられた孤児・捨て子、不幸な女性、極貧家庭の老人、身体障がい者、出所者・刑余者らを保護・救済する施設を個人で造りました。彼が目指したのは社会的に虐げられ、家族からさえも見捨てられた弱い人が、差別されず、蔑視されずに幸せに暮らせる「新しい村」でした。

榊原弱者救済所とは

や旦那衆も救済所を支援するようにもなったのです。
まさにこれこそ今日の「社会を明るくする運動」の魁さきがけといえる動きでした。結果、30年にわたり、1万5千人もの人が救済されたのです。
その後、大戦もあり救済所の存在は忘れられていました。
しかし80数年後の平成22年。この亀三郎の偉業を称え、後世に伝えようとする動きが起き、半田市、鵜根区、はんだ郷土史研究会、半田保護区保護司会が四位一体となり『榊原弱者救済所跡保存会』が立ち上がったのです。

「俺は正業につく。正業といっても他でもない、今後は世間から見捨てられた人や帰る家がない人たちの助けになろうと思っている」

「ここまで言うとう亀三郎は、若い衆の顔をもう一度、一人、一人、見回した。

「何をばかな、と思うだろうが、人間の一生は一度だけだ。極道ごくどうをして人さまに嫌われながら生きるのも一生。辛くとも、人さまのために働き、人さまに感謝されるのも一生だ。人さまに感謝される道を歩いてみることにした」。

部屋の中はまだ、ざわざわとしていた。

丁寧に丁寧に亀三郎は話しかけた。

「誰もが好きで悪わるになつたわけじゃないが、そうでもしなければ俺たちは食ってはいけなかったよな。そんな世間さまから厄介者やっかいもの扱いされる連中が、一緒に力を合わせて安心して暮ら



老病者宿舎 明治中期、富国強兵政策は格差を広げ社会的弱者を多く生んだ。孤児・捨て子、極貧の家は身障者や老人を捨てることがあった。帰る家のない不幸な女性や出所者も路頭に迷っていた時代だ。

せる家があらばいいと思わないか」

亀三郎は淡々と今後のプランを語った。

「鴉根の丘にそんな家を作る。新しい村を作る。ここでは前科者も不良も差別したりしない。みんなで更生の道を探し、手に職をつけ、堂々と社会に戻るようにする」

「身体が悪くて働けない者は、ずっとその家にいればいい」

「捨て子や浮浪児も引き取り、大事に育てる。そうすれば極道の道には入らず、堅気の人になれる」、そして、「この救済事業はやがて社会に認められるだろう」。

こう宣言した亀三郎は鴉根の丘に「新しい村」を作る準備に取りかかったのである。

半田市鴉根は今でこそ立派な住宅地だが、

明治の初期はまったくの原野。今の名鉄線より山側は人家など殆ど無く一面の雑木林だった。

その山の一带に成岩町の名刹、常楽寺が広大な寺領を持っていた。亀三郎は弱者救済の必要性を訴え、寺領の一部を無償で借りることができた。それを聞いた成岩町の大地主、榊原市兵衛や後に成岩町長になる森竹四郎が、「慈善事業に使うのなら」と鴉根山に所有する山林を寄付してくれた。

そして嬉しいことに、慈善活動をしようとする亀三郎に何と30人の若い衆がついて来たのだ。つまりこの瞬間、30人ものヤクザが更生の道を歩みはじめたのである。

鴉根の丘に槌音高く

明治31年（1898）春。鴉根の丘に開墾の槌音が響いていた。

亀三郎と30名の若い衆は成岩町極楽寺に借りた仮の家から毎日、毎朝、鴉根の丘に通っていた。

「おい、おい、べつ甲亀の一統だよ。鴉根の山で慈善事業をするらしいが、どうせヤクザのすることだ、新手の資金集めだろううよ」

町の衆の目は冷たかった。

そんな冷たい目にさらされながらも亀三郎たち30人は鴉根に通い続け、開墾を続けた。

明治32年正月、鴉根の丘の雑木林の中にぽっかりと6百坪の更地が誕生した。その6ヶ月後に藁屋根造りの粗末なものだが2棟の宿舎も出来上がった。

最終的には総面積22町歩（6万6千坪）、そのうち4千坪を整地して宿舎や武道場、宗教

施設など11棟を建設。総建坪は7百坪を超える大きなものとなっていくのだが、その第1期工事といえるものが完成したのである。

早速、救済事業がスタートした。

道端に捨てられていた赤ん坊を連れてきた。橋の下で泣いていた捨て子も連れて来た。手足に障害がある老人は極貧家庭ゆえに「口べらし」で家を追われていたが、その老人も鴉根に連れてきて保護した。あつという間に救済した人は10人を超え、宿舎は一杯になった。

救済してきた人は働けない人ばかり。それに30人の若い衆。食費だけでも大変な額になる。宿舎の玄関に墨痕鮮やかに「榊原救済所」と記した看板は出したが、亀三郎の財布はさらっぱだった。

ニコニコと笑う亀三郎だが、着る物がだんだん粗末になっていった。寒の季節なのに綿のドテラも着ていない。自慢の懐中時計はいつの間にかない。それどころか着物の帯が藁縄わらなわに変わっていた。そんな物まで金に換えていたのだ。

それは30人の若い衆も同様。食いたい盛り着たい盛りの若者が、粗末な食事に文句も言わず、ボロな衣服もいとわず、もくもくと新しい宿舎の建設や畑作業に従事していた。

若い衆は一人も減っていない。この事業に対する情熱も失われていない。それは不遇な境遇に生まれ育ち、世間から差別され、苛まれて生きてきた彼らが、生まれて初めて「世の為、人の為」に働ける喜び。同時に、今まで自分たちを差別してきた世間に対する逆バネが働いていたのだらう。救済所の雰囲気は良好だった。

しかし、亀三郎と救済所は資金的な面では大ピンチだった。

半田地方の豪商たちの援助

困窮の亀三郎。そこに願ってもない助っ人が来てくれた。知多郡亀崎町の酒造家で資産家で衆議院議員の天笠伊左衛門である。

「地元で、こんな救済事業が始まっていることを知らぬとは迂闊^{うかつ}だった。本来、官が行うべきことを一人の民間人がされている。頭の下る思いだ」。

天笠は鴉根の丘に駆けつけた。人力車から飛び降りた天笠は一瞬、たじろいだ。彼の目に映ったのは、三棟の宿舎、鶏や豚の牧場、馬小屋、そして畑。粗末だがしっかりと整備された施設の在り様だ。かつて一面の荒れ野だった鴉根の地を知る天笠にとって、衝撃が走る思いだった。

元々篤志^{とくし}の思いが強い天笠は全力での応援を亀三郎に約束した。

数日後、天笠から荷が届いた。大八車で二台の大きな荷であった。

布団が三流れ、木綿の半纏^{はんてん}十八枚、股引^{ももひき}二十五足、木綿綿入の着物三枚、袷^{あわせ}の着物三枚、紺足袋十足、手拭四十五枚、それに玄米一俵。

救済所に歓声があがった。

当時の衣類など布物は現在と違い格段に高価だった。食費に手一杯の亀三郎のやりくりでは、とても衣類にまで手が届かないことを天笠は救済所の人たちを見てわかっていった。

天笠は資産家仲間「着る物や建築材料を援助してやってくれ」と頼んでくれた。

そんな天笠の声を受けて、半田の豪商・小栗三郎より篤志の品物が届いた。

小栗三郎商店は「萬三^{まんざん}」の屋号で知られる知多半島屈指の店。萬三からの品は次。

木綿綿入の着物三枚、木綿の半纏^{はんてん}二枚、子どもの半纏六枚、子どもの綿入の着物二枚、子どもの襦袢^{じゅばん}七枚、紺足袋十六足、白足袋五足、子どもの紺足袋四足、踏下一足、子どもの股引一足、前掛一筋、それに赤味噌一樽。

子どもの物が多いのは、捨て子たちを救済所で保護していることを聞いていたからだろう。「子どもたちには、せめて世間並みの服装を」、そんな気持ちが伝わってくる品々だ。

品物もありがたかったが、知多郡を代表する



児童宿舎の前 7人の子もたちと5人の女性。この宿舎で一緒に暮らしていた。後に「笛を吹く少年」の石像。「寄贈 花井芳二郎」の札が。この日は大正9年10月。「記念碑の除幕日」で、よそ行きの服装。少年の運動靴には時代的に驚きもある

名家、天笠家や萬三家より篤志品が届いたという事実が大きかった。知多郡地方は武家社会ではない。商人社会である。その支配者ともいえる豪商が応援する施設、榊原弱者救済所は一気に認知されたのであった。

明治35年を迎えるころ、救済所への理解はさらに深まっていた。

2月1日付の知多新聞に、「さる一月十八日以来、成岩町貧民救済、榊原亀三郎氏へ金品を恵与せられたる篤志家左の如し」の記事。

十八日 半田町小栗銀作氏より蒸米粒一斗五升

十九日 杉本半田警察署長は織田巡査部長を随えて貧民救助の状態及び牧場の設備等を巡視せられたる後、同所念仏堂に不具者の読経に参し、灯明料として金若干を寄付せられたり

二十四日 亀崎町伊東信蔵氏より紺足袋二足、シャツ十二枚、白足袋十三足、股引二足、木綿縞子ども袷一枚、チョッキ一枚

二十九日 半田町字岩滑新田榊原兵四郎氏より金二円

これは十日間ほどの記載だから、通算すればかなりの寄付が寄せられるようになっていたはずだ。また、見逃してはいけないのは、記載の四件が地元の成岩町ではなく、半田町、亀崎町、岩滑^{やなべ}村と町をまたがっていることだ。

この時代、この地方は近隣町村の仲は特に悪かった。半田町と成岩町は境界線を争って愛知県を巻き込むほどの大紛争になったあげく、互いを罵りあう「成岩ガンチ（他所を蔑視する造語）」の思想が定着するなど、その対抗意識

は異常に強かった。隣の町に行くときは身の危険すら感じる、というのが一般の感覚だった。

だから町境を越えて篤志が寄せられている事実は些細なことのようなのだが、この地方の郷土文化史的にみると瞠目すべき出来事なのである。

亀三郎の弱者救済事業は少なくとも「ガンチの壁」は破っていたのだ。

救済所を支えた地元の名士たち

左の「記念碑」に刻まれた半田地方の企業で、現在もご盛業な方をみてみる。

伊東合資、金沢歯科、ミツカン、萬三商店、新美眼科、中野整形外科、小出医院、尾張製粉、丸初製菓、天竺酒造等々。その他、調査不足で



榊原弱者救済所跡・史跡公園 移築された「記念碑」には救済所を支援してくれた91名の名が刻まれている。大臣、知事、高僧、高官。さらに金原明善、留岡幸助ら全国的著名人ほか、地元の商人も多い。板山の晒し業者は亀三郎亡き後も救済所を支えた。

漏れも多くあると思うが、お許し願いたい。

救済所は開所から数年は極貧そのものだったが、亀三郎たちの身を粉にして弱い人たちのために働く姿に打たれた地元の人たちが支援するようになり、日本初、日本最大の民営の弱者救済施設が続けられたのである。

こんな史実も書いておく。

「亀三郎の心意気に感動した。救済事業への寄付を集めてやろう」という人が現れたのだ。

乙川村の平野萬太郎、杉浦勝次郎、半田町の榊原畔蔵である。平野は乙川村の料理旅館「大島屋」の若旦那。杉浦は大農家の主人。榊原は半田町の商店主。地元のいわゆる旦那衆だ。

彼らは豪商ではないが町の中心にいる人で住民との距離も近い。そんな旦那衆の応援は地域住民に安心感を与え、亀三郎の救済所の距離を縮めることができた。この三人の登場は派手ではないが極めて貴重だった。

平野の「大島屋」は、昔から面倒見のいいのが評判の店である。乙川村の生んだ「悲しき横綱」大碇紋太郎を長く居候させていたのもこの店。また、後に画家名鑑に載るほどになった荒川公圭も世話になっている。日本画壇の重鎮で文展（今の日展）の審査員にもなる山本梅荘もこの店の居候だった。その逸話である。

「山本梅荘がまだ三河に住んでいて半郎と号していた頃、知多郡に來ると大島屋に逗留していた。飲食代や宿賃の代わりだったのだろう、彼の画が大島屋にたくさん残っていた」。

「その後も梅荘の弟子たちが多く来ていた。代金代わりに置いていった彼らの画や短冊が、

小折に二、三杯もあった」。

このように不遇の文化人には同情的で数多くの文人、画家などを「ただ同然で泊めたり遊ばせたり」していた店であった。

ちよつと脱線。

この「大島屋」の子孫筋に近年、半田保護区保護司会の会長を務めた蟹江正行がいる。蟹江は、埋もれていた亀三郎の救済所の発掘と一般公開に尽力し、榊原弱者救済所跡保存会を起ち上げた中心人物だ。「大島屋」の平野から現代の蟹江。亀三郎を繋ぐ善い流れが見えて嬉しい。

さて明治の当時に戻る。

大島屋の平野が一肌脱いだ。かつて面倒をみた山本梅荘に救済所の支援を頼んだのである。

梅荘は快諾。それを実子であり弟子でもある石叟と香雲に話す。すると彼らは、驚くような方法で榊原救済事業の応援をしたのである。

慈善音楽会と千枚画会

石叟の趣味は音楽、トランペット奏者だ。弟の香雲もアコーディオン奏者。二人は「半田楽友会」というアマチュアグループを組織していた。ここを中心に音楽会は準備されていた。

この音楽会はアマチュアの洋楽だけではもない。琴、琵琶、三味線。それに謡曲。さらに當時流行の義太夫、これはプロを呼んだ。

会場は半田町北条の光照院。広い本堂を持つ名刹である。日時は明治41年10月24日午後1時開演と決まりポスターも作成。こちらは

絵画のプロ。梅莊の門人たちが技を競って描く
のだから文句なし。芸術的にも立派なボスター
が街角のあちこちに貼られた。あつという間に
半田地方の各町村に慈善音楽会の開催が知れ
渡った。

いよいよ当日。音楽会が開演された。

今はよくあるチャリティーコンサートだが、当
時は稀なこと。まして一般の人たちには珍しい
音楽会。広い光昭院に人垣が出来たのである。

「子どもは無料だよ。けど座布団や椅子に
坐っちゃいけないよ。お席は年長の人に譲るん
だ」

「大人の人は篤志を願います。いくらでも
構いません。出せる人はお札を、そうじゃない
人は小銭で結構。このお金は恵まれない人を
救済している榊原救済所に全額、寄付されま
す」。

会場の入口と舞台の横に空の酒樽が置かれ、
そこに次々と金が投げ込まれていった。おそら
く半田地方初であろうチャリティーコンサート
は大成功を収めた。

さらに石叟は妙手を打った。

石叟は十数人の弟子たちの技量を練磨する
ため二年間の合宿をし、それぞれに一千枚の画
を描かせることにした。この合宿を「千枚画会」
と名づけた。そして千枚の画が完成すると即
売、それを寄付金に充てる。こんな企画だ。

この千枚画会の合宿は慈善音楽会の翌年5
月に光昭院で始まった。

千枚画会の進め方は、まず石叟が、尺五絹本
に密画の山水を描く。それを弟子たちが見て
臨写する。石叟の筆使いを側で見て、弟子たち

もそれに習う。だから石叟も一千枚の画を描く
わけだ。合宿する弟子同様、彼は早朝から深
夜まで画筆を握り続けていた。

合宿には香雲もよく顔を出して弟子を指
導。梅莊も時々来て、弟子たちを励ましていた。

二年間の猛烈な合宿で弟子たちの技量はす
こぶる上達をみた。そして一人が千枚ずつ描
いた画が、光昭院に積み上げられていた。見事、
技量練達の面では合宿は成功したのである。

そして販売である。買い手があるかどうかは
心配だった。しかし、心配をよそに一万枚をゆ
うに超す画はほとんどが売れた。これは取り
も直さず弟子たちの技量が上り、値段の付く
画を描けるようになったからに他ならない。

弟子もめでたしだが、石叟もしてやったり
だ。彼の手許に7千円ほどの金が出来ていた。

絹本代、絵具代など約4千円が経費。
残りの約3千円は、新築中の半田小学校へ
2千5百円を寄付、榊原救済所に5百円を寄
付。地元の町内会、子ども会にも合わせて百円
を寄付した。

救済所に来た5百円の寄付は、みすばらし
かった建物の改修にあてられ、少しは見られる
ものになった。

千人に近い音楽会の入場者、千枚画会の画
を買ってくれた数千人の人。そんな多くの人に
弱者救済事業を知らしめてくれた梅莊一門の
功績は金額をはるかに上回るものであった。

金原明善と收容者の社会復帰

亀三郎がヤクザの足を洗い、慈善事業に人生
をかける決意をさせたのは金原明善である。

静岡の大資産家の金原。巨額の私財を投げ
出して成し遂げた天竜川治水事業や北海道
開拓、木曽川上流の植林事業などで知られる
偉大な社会事業家である。また、更生保護事
業の産みの親でもある。

金原に心酔した亀三郎は彼の許に通い、社
会事業を学んだ。金原は亀三郎に多くの人を
紹介した。例えば山岡鉄舟の一刀正伝無刀流
の道場。ここで亀三郎は武士の哲学と剣術を
会得した。後に愛知県警剣術師範となる源が
ここである。

安城農林学校長の山崎延吉もそう。山崎は
鴉根の救済所に何度も通い、耕作物や土壌、肥
料の指導にあたった。桑やブドウを植えさせて
安定した収益をあげさせた。さらに大根の栽
培法を教えて大豊作に。それを知った成岩の
農家が救済所に教えを乞いに来たほどだ。結
果、成岩、武豊は大根の名産地となる。有名な
「武豊たくわん」の発祥は鴉根救済所だった
わけだ。

社会復帰の後押し、支援

社会から弾き出された弱者を保護救済す
るのが事業の終わりでない。保護した人をもう
一度、社会に送り出すことが重要だ。亀三郎は
そのために様々な努力をした。ひとつだけ紹介
する。

社会復帰していく男に、「がんばって百円貯
めろ。貯まれば俺が百円足してやる。二百円あ
れば借家が借りられて家財道具が揃う。そう
なれば嫁を世話してやる。いい家庭を作るん
だ」。

恵まれない家に生まれ、虐げられてきた男には「いい家庭が持てる」は何よりの励みになった。懸命に働いたのである。

この結果、榊原救済所からの社会復帰の成功率(自活率)は80%を超えた。これは金原の創った静岡県出獄人保護会社の自活率が45%だったことを思えば驚異的な数字である。

プロのスタッフがいる静岡保護会社を超えた要因は、「各々の不幸な身の上を理解して、お

前は一人じゃない、俺たちがいる」の姿勢で接することができたからだろう。

○

亀三郎は大正14年7月に事故死したのだが、その数日前に新聞記者にこう語っていた。

「お上がしつかりと貧困対策や福祉対策をしてくれなければ、孤児も生まれる。行き場のない出獄者も、路頭に迷う老人もでるだろう。そんな人たちを私は黙って受け入れていく」

もあった。

そして南吉は救済所に伝わる「三本足の白狐」の話も聞いていたのだろう。

榊原亀三郎が誤って猟銃で撃ってしまった白狐が、片足を引きながら子を連れて救済所にやってきた。そしてここに棲みつき、親子共々救済所の一員となり幸せに暮らした。狐の死後、亀三郎は祠を建てて稲荷神社として長く祀った。これは実話である。

南吉はこの悲しくも美しい話を最晩年の名作『狐』に見事に採り上げている。

『狐』は鴉根山が舞台。子どもの下駄から物語は始まる。足を引いた母狐も登場する。この足を引く母狐は救済所の三本足の狐がモデルであることは明白。死に直面した南吉が最後に書いたのが「救済所の狐と母親の愛」だったのである。

南吉の昭和13年1月4日の日記にこんな俳句が記されていた。

寒月や烏根山の狐たち

寒月や坂の上から下駄の音

この句が名作『狐』の基礎なのであろう。

新美南吉と鴉根山の狐たち

新美南吉が鴉根の丘に住んでいたのは昭和12年(1937)9月から翌年の春。日本最大手の飼料会社、杉治商會に南吉は就職。鴉根にある同社の畜禽研究所に勤務、社員寮に住んでいた。

寮は鴉根の榊原弱者救済所に隣接した所。好奇心旺盛な南吉のこと、救済所には度々訪れていたはずだ。当時の日記には救済所の小学3年生の子を自転車荷台に乗せて成岩小学校の近くまで送って行った記載



救済所のアイドルだった三本足の狐は陶像となって、鴉根の榊原弱者救済所跡・史跡公園で公開されている。この近くに稲荷神社があった。南吉の恩師で童謡作家の巽聖歌は南吉の死後、わざわざ鴉根を訪れて狐の祠を見た。「これが南吉の言っていた稲荷神社か」と、その感慨を日記に記している。



鴉根史跡公園 皆さまのご支援で救済所跡は公園化。一般公開されている

「二人の孤児もいなくなる世など私の生きているうちには来そうもないから、鴉根の丘に理想的な長屋を百軒建てて、多くの孤児や家のない人たちを引き取るつもりだ」。

30年に亘り1万5千人もの弱者を救済した榊原救済所の偉業も、地元の人々、地元の旦那衆の支援がなければ成すことができなかったのだ。本稿ではそれらの史実を率直に紹介し、

現代の皆さまの共感とご理解を求めるものである。

【西まさる】

* 西まさる『幸せの風を求めて』(新葉館出版)が底本。
* 敬称略

榊原弱者救済所物語

発行:半田保護区保護司会 発行日:令和4年3月24日

〈お問合せ先〉

半田更生保護サポートセンター

TEL 0569-84-0683

半田市東洋町二丁目1番地 半田市役所2階

半田保護区
保護司会HP



榊原弱者
救済所跡
保存会HP



半田更生保護サポートセンター
公式Facebook

いいね!お願いします



半田更生保護サポートセンター
公式Twitter

フォローお願いします

